

私の歩んだ道

—見えないから見たもの③

岡山県立岡山盲学校講師

竹内 昌彦

高2の夏休みに、近所のおばさんがうちに来て、母に「この右の肩が痛^いうて困るんじや、腕が動かんし」。今思うと五十肩ですね。そのおばさん、私に「あくら僕、盲学校で按摩^{あんま}習いよると違うん？」あの時嫌な予感がしました。「習いよるで」「丁度よかったです。おばちゃんが練習台になってあげる。ちよつとこ採^とんでごらん」恩着せがましいことを言う。しょうがないから採^とんであげたんですよ。

しばらくしたら、玄関に大きいスイカが2つも転がっていました。おばちゃんに聞いたら、「帰ったらこの肩が軽^かうて気持ちよええし、後ろでエプロンの紐^{ひも}が結べたんよ。こんなことができたのは正月以来で。あんたが頑張つて採^とんでくれたからよ」と言うて、何べんありがとうと言ったか。

その時思つたんです。按摩を馬鹿にしとつたけども、大人があんなに喜んで、あんなによう効くの

か？案外面白い仕事かな、一発やってみるか！と。1年生の本から出してきて、全部読んだんですよ。そしたら2学期になって先生に呼ばれて「成績がどんどん上がつてる。お前本気なら、ちよつと難しいけど、大学へ行って教員になる道がある」と言われたんですよ。それで挑戦して教師になったんですよ。



親を喜ばせることが 人生の目標

私の親は息子の目が見えなくても、お祭り、博覧会、動物園、サーカス、どこへでも連れて行つ

から見ると、私たちの命の時間はポチャンという音ぐらいの短さと思えません。人からの妬み、嫉み、悪口などで悩んでいる暇はありません。私の時間は永遠ではないのです。この「ポチャン」という言葉で、私は目の前が明るくなりました。かけがえのない大切な私と思えたら、不思議と元気になって喜びが湧いてきました。年齢は関係ありません。お一人お一人の笑顔は、素敵な優しい環境を作ります。

授かる命には必ず意味があり、使命があります。皆さんの生命尊重活動が全国に広がり、赤ちゃんの命が救われています。世界平和は誰かが作つてくれるものではありません。一人一人の心が穏やかであれば、他人を思いやることができ慈しみがハチドリの一滴のごとく小さな波紋となり、そして大きなうねりとなって、温かい世の中を子ども達に繋げたいものです。

(埼玉いのちの講演会より)

てくれました。父親は毎晩「鞍馬天狗」「宝島」「西遊記」等を読んでくれました。だから本が好きになりました。日曜日になると、夏は旭川で水泳の特訓、秋や冬は周辺の山に行き、山登りで鍛えられました。

昭和39年、東京でオリンピックがありました。オリンピックの後には障がい者のパラリンピックがあります。パラリンピックはできてまだ2回目でした。選手が少なかったのも、日本からも大勢参加できて、私も盲人卓球の選手として行ったんですよ。音が出るボールを転がして打ち合う競技なんです。ちゃんと金メダルを取つてきました。

でも、金メダルより嬉しかったのは、出発する日、岡山駅のプラットホームに大勢見送りの人が来て、「竹内、頑張れ」「メダル、貰うて来い」と言うて見送つてくれました。列車がガタつと動き出したその時、無口な父がいきなり

大きな声で、「竹内昌彦 パンザーイ！」って、3回も叫びました。びっくりしたけれど、本当に嬉しかった。この万歳は、重い障がいを背負った我が子を育て上げた父親の、子育ての勝利宣言の万歳以外の何物でもない。「お父さんのお陰でこんな体をもらつて、お父さんのお陰で東京に行ける。ありがとう、お父さん！」そう言つて、下を向いて涙を堪えるのがやつとでした。

その後、受験勉強を頑張り、大合格の祝電が届いて「お父さん、通つたよ」つて言えた時、初めて親孝行したと思えました。70年生きていく中で、その人生の大きな柱は、親を安心させたい、喜ばせたい、これが一番の目標でした。

障がいの息子の命の輝き

教師になつて幸せな結婚をしました。でもそこに人生で一番悲しいことが待つていました。最初に

生まれた長男が、重い脳性小児まひだったのです。いつまでも首もすわらず、寝たきりでした。目が見えない夫を持ち、体の動かない赤ん坊を抱えて、あの若い母親は心の中で絶望したと思うんです。でも愚痴を言わない強い人でした。今から40年前、どの保育園も幼稚園もこんな子は預からなくて門前払いでしたけど、たつた一つ、今もある、あゆみ保育園の先生は違いました。「まあ、可愛いお子さんじゃない。僕、みんなと一緒に大きくなるうね」つて、うちの子を抱きとめて下さつたんですよ。手を合せて拝みたいほど嬉しかった。



ところが、岡山市は初め反対しました。でも当時の市長さんが「あの子を保育園から出したら、どこに行けますか？岡山市は今年から障がい児保育を始める。その保育園は市が全面的に援助する」と決めました。そのお陰で、それ以後の岡山の障がい児は保育園に入れるようになりました。うちの子はそんな大きな仕事をしました。

でもそれが一番いい時で、あの子は7歳で肺炎を起こして死んでしまうんです。一度も自分の足で歩けず、言いたかつたと思うんですけど、お父ちゃんお母ちゃんも言えずにあの子は死んだんですよ。あの苦しい酸素テントの中にいて、このつまらん親父を見つけて、あの子は顔いっぱい喜んで、それが最後でした。私はそこに、息子のいのちの輝きを見ました。あの子はあんな体でも、一生懸命生きようとしたんですよ。

(つづく・H27年11月号より)